

A Dialogue on Philosophies of the Orient

東洋の哲学
を語る

池田大作／ロケッシュ・チャンドラ

第三文明社

ロケツシュ・チャンドラ

池田大作

東洋の哲学を語る

【著者略歴】

ロケッシュ・チャンドラ (Lokesh Chandra)

インド文化国際アカデミー理事長。1927年インド・アンバラに生まれる。父親はサンスクリットの権威ラグヴィラ博士。ラホールのバンジャブ大学で言語学修士号、オランダ・ウトレッチ大学で博士号を取得。インド国会議員 (1974～1986) などを歴任。サンスクリット、パーリ語等22カ国の言語に精通。仏教に関する著書が462冊。主な著書に『シャタピタカ』がある。

池田大作 (いけだ だいさく)

創価学会インタナショナル (SGI) 会長。創価学会名誉会長。1928年東京都生まれ。創価大学、アメリカ創価大学、創価学園、民主音楽協会、東京富士美術館、東洋哲学研究所などを創立。『人間革命』(全12巻)『世界の指導者と語る』など著書多数。また、世界の識者と対話を重ね、『二十一世紀への対話』(A・トインビー)『二十世紀の精神の教訓』(M・S・ゴルバチョフ)『子どもの世界』(A・リハーノフ) など数多くの対談集を刊行。

東洋の哲学を語る

二〇〇二年十月十二日 初版第一刷発行
二〇〇五年九月二十一日 初版第四刷発行

著者 池田大作 / ロケッシュ・チャンドラ

発行者 松岡佑吉

発行者 株式会社第三文明社

東京都新宿区本塩町一―一

郵便番号 一六〇―〇〇〇三

電話番号 〇三(五二六九) 七一四五 (営業)

〇三(五二六九) 七一五四 (編集)

URL <http://www.daisanbunmei.co.jp>

振替口座 00150-3-117823

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© Ikeda Daisaku/Lokesh Chandra 2002 Printed in Japan
ISBN-476-05036-0

乱丁・落丁本はお取り替えますので、ご面倒ですが、
小社営業部宛お送り下さい。送料は当方で負担いたします。

はじめに 池田大作 1

まえがき ロケツシユ・チャンドラ 7

第一章 新世紀の文化と哲学 17

第二章 東洋思想と近代化 39

第三章 ガンジーと法華経 61

第四章 未来に精神の大河を 79

第五章 世界市民の哲学 99

第六章 ミリンド王と大乘仏教 123

第七章 鳩摩羅什と仏教東漸 145

第八章 釈尊しやくそんの悟りさと——人間の宗教 169

第九章 民衆のために——釈尊しやくそんの弘教ぐきやうの旅 191

第十章 古代こだい世界の「文明間対話」——西方への仏教の影響えいきやう 215

第十一章 「第三の千年」開くインド・中国の精神的伝統でんとう 239

第十二章 “生命宇宙たんきゆう”への探究——天台てんだいの“一念三千” 265

第十三章 日蓮大聖人と「法華経」 291

第十四章 文明間対話に向けて 317

第十五章 SGI運動と菩薩道ぼさつだう 343

索引

はじめに

二十一世紀を「平和」と「共生」の世界へ。そのための「新たなる指標」は、どこに求めればよいのか——「哲学不在」といわれる現代、精神の大国・インドを代表する知性、ロケッシュ・チャンドラ博士と私は、東洋の智慧を探索する「精神の旅」に出ました。

幾千年におよぶ東洋哲学の大山脈は、莊嚴なる大宇宙の陽光を浴びて、人類史にそびえ立っております。その堂々たる峰々からは、清冽な水流が迸り、時代の変転の中で滔々たる「大河」を形成してきました。そこには、広大なる沃野が開かれ、豊かな生命の創造と、万物の平和共生の営みがつづられております。

人々の生命を潤し、限らない活力を与え、生の指標となった、深遠なる精神の水脈こそ、「人間主義の思想」であります。

私が心から尊敬してやまぬロケツシュ・チャンドラ博士は、私どもの対談を、「人間的価値の永遠性」について語り合う旅であると、表現されております。

博士の炯眼けいがんの通り、永遠なる「人間的価値」は、東洋の歴史の激動期げきどうきに、「宗教改革」「思想運動」「新哲学の形成」「権力との闘争」、そして「平和創造」の原動力として、その真価を発揮してきました。

本書には、人間主義を掲げた「平和・非暴力の戦士」として、古代インドのウパニシャッドの哲人から、二十一世紀に活躍する世界市民まで登場します。

人間の宗教を創始した「人類の教師」釈尊、仏教とギリシャ思想との「文明間対話」を行ったミリンダとナーガセーナ、そして、仏教思想を政治に反映した「王の中の王」と称されるアショーカ等々——古代インドの精神史は、人類の「宝石」と輝いております。

インドに出現した仏教は、大乘仏教、なканずく『法華経』を変革と統合の「旗印はたじろし」とする民衆によって、シルクロードを通じて流伝るでんしていきました。そこには、偉大なる翻訳者ほんやく、鳩摩羅什くもらじゆの登場もあります。

仏教は、西方へは、ギリシャ思想、初期キリスト教に影響を与えたとされております。そして、東方へは、悠久なる「中国文明」との対話の中から、「中国仏教」を形成していきました。儒教や道教との真摯なる「交流」を通して確立された、天台の「一念三千」論は、世界哲学史に燦然たる光を放っております。

そして、日本では、十三世紀に『法華経』と天台哲学を基盤として民衆の幸福と世界平和を掲げた日蓮仏法が、人類史の大舞台にその雄姿を現します。

その哲理と思想は、帝国主義、軍国主義の嵐が荒れ狂った二十世紀に、牧口常三郎、戸田城聖によってそのまま実践され、創価学会が創設されます。そして、今日、民衆運動としての菩薩道たるSGI運動へと展開しているのであります。

インドの天地では、二十世紀の初頭、マハトマ・ガンジーが、民衆を率いて反植民地運動を展開します。牧口、戸田が、日本の国家主義と対決したのと同時期であります。

ガンジーの「非暴力の闘争」には、釈尊の「人間主義」「平和主義」の思想が色濃く反映していると指摘されています。

このガンジーと『法華経』と、そして日蓮仏法を結ばれたのが、ロケツシュ・チャンドラ博士の父君、ラグヴィラ博士その人であります。

ラグヴィラ博士は、文字通りの「世界的知性」であり、二十数カ国語——その中には日本語も含まれますが——を自在に駆使する言語学者であります。『法華經』にも造詣の深い仏教学者であり、東洋文化に精通された東洋学の権威でありました。そして、何よりも、夫妻でマハトマ・ガンジーとともに戦い抜かれた「平和・非暴力の戦士」であります。

このラグヴィラ博士こそが、マハトマ・ガンジーに『法華經』の精髓——南無妙法蓮華經の深義と、日蓮仏法における「立正安国」の権力闘争を紹介した、その人だったのであります。

ラグヴィラ博士は、東洋の精神的遺産を未来に伝えたいと、「インド文化国際アカデミー」を創立されました。

父君の創立されたこの「アカデミー」の後継者であり、現・理事長が、ロケツシュ・チャンドラ博士であります。

博士は、父君と同様、サンスクリット、ヴェーダ語の世界的権威であり、幼少期より『法華經』等の仏典に親しんでこられた仏教学者でもあられます。今、博士は、父君の残された膨大な「東洋の智慧の宝石」を『シャタピタカ(百蔵)』として出版し、「父子一体」の事業を世に問いつけておられます。

博士の中には、東洋の精神的遺産が、ことごとく収められており、いかなる「テーマ」を語

り合つても、即時に、博識はくしきにして詩情豊しじょうゆたかな「言語」となつて表出ひょうしゅつしてきます。その「言語」には、「永遠なるもの」から発せられる「英知」と、平和を愛する熱い「情熱」と、邪惡じやあくと対決する「人類愛」が込められております。

二十一世紀に入つても、人類は、二〇〇一年の「九・一一」同時多発テロに象徴されるように、「暴力」と「分断」のエネルギーに翻弄ほんろうされ続けております。

グローバリズムの「光」の奥には、深い「影」がひそみ、「分断」のエネルギーが、いまだに、人間と自然、人間と社会、そして人間精神そのものを引き裂さいております。

博士と私は、東洋哲学史に登場する魂たましいの巨人の激闘を主軸しゆじくに、「分断」を「融合ゆうごう」へ、「戦争」を「平和」へと導く「精神的指標」を求めて、思索しさくを続けてきました。

本書は、その思索のプロセスである「精神の旅」をまとめたものであります。

博士と語り合つた「新たな指標」が、読者の方々の歓喜の人生と平和社会を照らし出す一つの「光源」となれば、これに勝まさる喜びはありません。

インドの大詩人タゴールは謳うたいました。

「再び我々は旅を続けなければならぬだろう——どんなに長い道のりであろうと、正義のみに従う、という確たる信念で」（溝上富夫訳）

ロケツシュ・チャンドラ博士という最良の友との「精神の旅」に、幾多の青年が続いてくれることを私は祈っております。

池田大作

まえがき

この対談が開始されたのは、一九九八年十一月のある日の午後のことでした。ひんやりとした空気がただようその日、妻と私は、池田先生および数人の方々とともに、日本式の畳たたみと掘りごたつの部屋に座すわっていました。そこで、池田先生と私は、人間的価値の永遠性について語り合ったのです。

人間的価値とは、炎ほのおのように輝かがやきわたるものであり、また、子どものような純粋性じゆんすいせいをはらんだものであります。人間は、有情うじようであれ無情むじようであれ、この宇宙のすべての存在たを讃たたえ、守らなければなりません。そして、物質主義ぶつしつしぎという貪欲どんよくな業火ごうかを防ぐ衣ふせを、身にまとわなければならぬのです。

対談を進めるなかで、私たちは、束縛そくばくなく天空てんくうを駆けめぐる、知性と思想の「馬車」を見い

だしました。そして、運命という宝をそなえた「時」の深遠さについて、また、未来を豊かに開花させる妙なるエネルギーについて、考察したのです。

その時、私は、池田先生という高くそびえ立つ人物の前にいました。先生は、多様なものを統合しゆく道を探究し、各国を歴訪してこられました。先生が積み上げてこられたものは、常に新しく、常に繁栄し、「私」「私たち」と「生きとし生けるもの」を統合してやみません。

この対談には、清冽な「時の奔流」から生まれた小石がちりばめられています。これらの小石は、インド、ギリシャ、中国、日本をはじめとする国々の古典的文化の伝統によって磨き上げられたものであります。

インドの巡礼者たちは、雪がとけ、春から夏に季節が移るころ、凍るように冷たいガンダキ川の急流を転がり落ちてくる黒い玉石を求めて、ヒマラヤの高地に向かいます。そして、そこで拾われた小石は、家庭や寺院に祭られます。そのように、この対談集には、宇宙を貫く、目には見えない意識を探究する私たちの小石が存在しているのです。

人間は、一人ひとりの内に眠っている「ヒューマニティーの感覚」の尊さを、再認識すべきであります。そうすれば、人間は、多くの河川、穀物、果物、雲、雨、牛などの、生命を養うものすべてによって育まれるでしょう。この宇宙は、縫い目のない網によって、相互に繋

がっているのです。

私たちは、一体となつて、さまざまな問題に立ち向かわなければなりません。あらゆる生命が、個人的道徳や社会的道徳、無私という規範きはんによつて、調和を保ち、訓練されるべきなのです。未来の人類は、マハトマ・ガンジーのように、高らかに宣言しなければなりません——「私の人生が、私のメッセージです」と。

本対談集の中心課題は、思想が歴史の中で果たした役割、自然と文化、人類の遺産と精神性、環境と人間の幸福等であります。各々の時代は、石碑せきひ、經典きやうてん、言葉、人々の心に、永遠の刻印を残しました。これらの遺産からどれだけ価値を学びとれるかは、私たちにかかっているのです。

人間の本質は、精神の内面で作用します。精神の内面的広がりが必要ならば、また、利己心を超越ちようえつした潜在的な生命への意識がなければ、外面的文明は精氣せいきを失つたものになってしまうでしょう。

マハトマ・ガンジーは、「自身の内面を制御せいぎよする力に気づかなければ、真に自立することはできない」と、強く主張しました。もつとも質実な人生こそ、もつとも奥深い人生なのです。

インドでは、「オーム、シャーンティ、シャーンティ、シャーンティ（オーム、静寂あれ、静寂

あれ、静寂あれ」と唱となえます。最初の「シャーンティ」は、自然との平和な関係、次は人間、社会、民族の間の平和、最後は自身の内面の平和を表しています。これら三つの創造的關係が成立し、崇高なものとなれば、環境の平和、社会の平和、精神の平和が実現されるのです。

池田先生は「平和の王」であります。先生が奏かなでる平和の讃歌さんかは、はつきりと人々の目にとまり、人々の夢を取り込み、人々の思考の中を行き交かいます。その讃歌は、先生の理想の真つただ中で、反響しつつ流れ出てくるのです。

本対談集には、幾世紀という時の恩恵おんけいによつて紡つむぎ出された、無限の「記憶の回廊かいろう」が張りめぐらされています。偉大な師匠であられる池田先生は、限られた時間を生きる人間を活気づけ、時代の制約をはね返し、人間のルーツに言及されています。

また、グローバル化と消費至上主義という生命の強奪者きやうだつしやによつて奪うばわれかねない、生命・ガイア（地球生命圏）・平和という人類の遺産いさんを、守ろうとされているのです。

先生の思想は、実体的な平和を語り、先生の言葉は、思想の洞窟どうくつの中で「裸足の平和の巡礼者じゆんれいしや」となります。

「前人未踏みとう」のご境地は、語る眼となり、見る言葉となります。先生こそ、私たちのために「未踏」の境地のイメージを彫ほりあげてくださる、未曾有みぞうの人物なのです。そのイメージと

は、人間の内面に存在する尊厳なるものに対して、相互の調和に対して、そして、「生命の根源」との融合ゆうごうに対して、深々と頭こゝろをたれることであります。

池田先生は、分裂ぶんれつした人間の内的存在と外的存在の裂け目に橋かを架け、事物と価値とを一体化いつげしようとされています。人間存在とを解き明かし、表現することによって、永遠に変わらぬ指標ひょうを示そうとされているのです。

ロケツシュ・チャンドラ

